



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

196

平林
文庫

平林

八川豊

三三

郷談 卷之二

好文堂

東都

曲亭馬琴

編演

頼光の脣切と擬へ

里見の重宝纖月佳刀

日の光。すこしが後、四時見るまほ代謝。去歲と暮れ今茲と明て天文も早

八年よりぬ却説唐稿素二郎へ。ちひもうけど鮮衣。簪とぬきとくそな衣紙。

徳橋氏の迷跡よ居らるゝ名族素大丈と更めく。り複もうく守義亮の近臣ふ

うじより君寵舊よ踰るものべ。させる才学あるをあらざるがる魯直

ゆく。生れ故ひ俗ふ後ひ我意張ることありしが傍輩を憎むひ人代

知るを難き。渠がその人どうり。大學が藝よ疎々。里見の主従難み

曉らん。義亮へおくよ。賢不肖然批判りく。年からに近臣戒諭。一あら

叙。素大丈死。渠が華洛よす。京家の仇佐成

あらるりのき。ごく采地べ殊さふ。東南の海濱うふ。曩祖安房守義實朝臣
 安房の白濱へ推みて。数々城と撃ちをふ。基盤もひれぬ。寡人よ
 至て九十六世干戈をひそむを止とぞ。剛敵哉前より受く。他鄉乃通路
 不候ふ。且京様の風流とアリ。耳々歎地の廣陥虚寧。伏す
 うりしよ。ころ素大丈夫獲とふ。彼桃源よ漢と晋のかくゆ世乃
 たどすひと初で見る。公地ぞ。加旗被り。ハモダフ前つ冬。上毛野る
 仁田山ゆ。越の軍兵伏砍ち。その刃へ素肌うりしが。一个所の瘡痕を負ひ
 船頭我巻る。そり復て。健雄へ観管領は仕。とをも。鷲を戰ひ。とくえ
 額よアス。古痴へ勇士の美。大刀痕うきど。能ある。奮ひ。仇を隠す。
 文小飾らざ。甘く縫ひ。謙遜辞讓然。肯と。うしく。心も。血氣よ
 て。す。うかのど。新集や。悔らざ。渠が夙夜。做す。と。諒解。の。く。せん。
 素大夫へ傷ひ。と。額よ。行かることや。う。さと。び。そあ。と。素大夫へ里見殿へ
 ま。年。すく。よう。の。年。の。端。すく。と。を。禮。代。実。生。の。近。臣。と。同。僚。ふ。と。忌
 嫌。つ。ぞ。老。冥。う。り。の。き。ど。義。堯。の。宣。ひ。件。の。禪。の。起。伏。僧。使。と。感。嘆。し。観
 彼。繼。橋。素。大。丈。が。か。ま。ぐ。守。の。心。ち。が。え。義。く。も。憂。く。と。な。が。そ。の。刃。を。ぎ。う。の
 幸。な。づ。を。佳。婚。我。招。る。妻。子。の。慶。福。く。う。と。て。い。と。喋。く。譽。も。あ。り。
 姑。と。や。ふ。も。え。う。り。け。と。嘗。聞。上。總。國。未。里。の。城。ぐ。り。程。遐。く。久。櫛。葉。村。乃
 東。の。う。坂。戸。市。場。と。唱。る。郷。よ。官。杜。太。く。立。上。久。う。ける。神。社。あ。る。ごく。郷
 ち。ね。や。福。守。み。と。坂。戸。明。神。と。す。う。と。う。或。ひ。逆。手。の。神。と。ひ。よ。カ。雄。命。へ。檜。皮。厚。く
 菖。う。る。鵺。尾。懸。魚。よ。細。ユ。と。竭。し。朱。の。玉。難。模。の。難。栖。注。進。引。く。ノ。神。々
 く。鄙。又。仙。び。う。れ。莊。觀。う。り。そ。そ。お。礼。公。毎。年。の。六。月。廿。七。日。伏。宵。宮。と
 ま。く。里。神。樂。あ。り。瓜。茄。豆。残。供。物。と。さ。す。く。受。地。子。と。稱。する。わ。の

坂戸の神の様へとうと停廢ちり。但舊例を然正ぐに。今トテ彼贊代よ。
青緒十貫大父寄進。本日の系儀と。旨こうる。十二人村下
下知。今至く二十餘年。人身神供へその移す。瓦礫をもて供め
とき。廿六日の宵宮守より使者父立と至く。青緒の錢十貫大父唐橋又
納う。四表を封ぐ。坂戸の神祠進。年例嘉儀をさうする。
時。六月廿六日。来里浦田の館。夏祭宗。四町。園の池水半涸て。杪上ふ
噪ぐ蟬の声。うちのゆきのまゝ熟き。各々こゝと。甲夜の間も。夢を破る
炎熱冷。義光へ廊。夥の絵燈籠。父掛。曲录。臂。右
水が氷水。浸る。宿寝。弱侍。継橋。素大父。集令。古今の成敗
將相の得失。評。或ハ四表八表の物語。うち。坐も。寝も。程よ。
夏の夜。短く。茂樹雷る。打水。庭の巻石。まご乾う。など。更やく

鐘の音。とまざ。食事をひり。近習のもの不暇。東首。翠。廉。け
ら。蚊帳の中。久しく。耳。竹。宗鄉。と。宿直袋。乃
初まじ解。素大父。應。更。也。廳。そぞ走り。あしう。義光。と。蚊屋。と。出く。
素大父。不。先。も。忘。ま。と。あ。今宵。坂戸の宵宮。彼贊代の
唐橋。ほど。と。ふ。封。今朝。と。彼。進。例年。嘉儀。され
その。と。ぬ。う。け。由。り。主計。人。豫。青緒。と。の。入。封。と。賜。とり。い。つ。威。
軍。發。と。粉。と。疎。と。つ。や。あ。ひ。か。り。ぎ。う。仇。と。曉。さ。び。と。恐。と。更。事。と。
子。と。年。と。今。と。女。と。使。者。と。く。坂戸の神。へ。贊。代。と。進。と。と。ぞ。う。く。し。
准。使。が。と。や。せ。と。呂。管。よ。と。し。つ。更。よ。近。習。の。の。残。石。と。津。木。御。す。
衣裳。が。更。や。彼。唐。橋。と。令。と。く。蓋。父。洞。一。展。檢。と。づ。ト。叮。咤。と。對。く。
注。進。引。禮。と。の。役。素。大。父。遠。く。礼。服。と。更。や。く。後。者。坐。式。百。集。令。ス。

ちと前よりしげが義光にて死途でけく。深夜の使者はとて安ざじてあらへる。
一條あり。近曾殿ゆうる。金剛神は灵りく。夜ろく彼此は立頭を人へて遠く
引剥と。大崎伊川の村長ホガ報知せることあり。これをやふ。古物木像は精
ひぐ。性氣もどり。うなよあらへる。假もを神體佛像の強盜よりもとを有
ある。こゝの中ふ情由あつまえ。こゝの守護へ坂戸の神が入る儀ふとぞらし。
洛鎌と同様同じ。年次もほくもどりとす。トヨマサく金幣と遂くらむ正末
時綱あらまうとてを。トヨダラフ前も守合せよ。さるふと。ちのびく正末が夥兵を
遣す。金剛神の虚室を拂ふ。今よ便宜義ぬがと。トヨマサと赤野山客もす。
本像は假托。人剥みぞあらんぞ。トヨマサと金幣と汝が武勇とよく
知り。トヨマサ今宵の火急の使者は揮す。遣よやく。トヨマサは妖怪變化を。
知り。トヨマサとモロヒジにむ。想羽賴光朝臣へ一夕更闌人定にて。監督を
せ。トヨマサとモロヒジに。本清和のうづと城汲べ満月。纖月と名づく。家
宝の刀一口あり。満月形へ長三尺。日月星宿の三光みぞ表へ。もる。鞘も金の
滿月なり。又纖月形へ二尺四寸。二尺へ陰陽両儀と象す。四寸へ四時と表へ。も
鞘へ銀の半月なり。又彼盤切膝丸。とて。安らぬ吉刀ゆく。はそそく。故に
重宝うき。頼光朝臣の故事。とぞ。四寸へ四時と表へ。もる。鞘も金の
汝は佩せん。汝へ綱ヶ武勇ふ做とひく。あやきものとて。うそく。とぞ。然りと
刺苗よ。叮嚀よ仰つ。枕上ふ掛りき。纖月形の佩刀とぞりく。そぞく。

火事屋

火事屋



領下さと。ソツ素大丈君恩身スルあまく。面目威儀スル。底心スル。面スル。而スル。元來武藝スル疎ク。心スル亦悍ク。仁田山スル厄難スル。大集ヒキ。紅四歲スル。復スルとやいスル。こスルみスルあトスル只スル一個スルの雜兵スル。於スル。寔スル怪我スル功名スル。死スル加之津凶スル。尼崎スル戰スル。面スル病スルを受スル。物スルしく。らうきスル。今宵スル使者スル。擇スル。當スル。とスル。お家スル。儀禮スル。食スル。明スル地スル。へりひスル釋スル。齋スル。樂スル。止スル。とスル。えスル。君スル遁スル。後スル者スル残スル。奴隸スル四人スル。極スル。昇スル。二人スル。蕉スル火スル。照スル。主スル役スル七人スル。遠スル。浦田スル城戸スル。走スル。坂戸スル市場スル。投スル。夜スル。や子四スル。比及スル。夏スル。や室スル。早稻田スル。風スル。麻衣スル。被スル戒スル。月夜スル。野千玉スル。鳥夜スル。後スルアラムスル心地スル。彼スル變化スル。船スル。疑スル。暗スル鬼スル。安危スル。歩スル。運スル。び。路傍スル草スル。縮スル。

桶スル。上スル。と。倘碎スル。け。身スル。行スル足スル。足スル。と。足スル。群立スル。蠻大丈スル。素大丈スル。門スル。叫スル。退スル。う。け。と。そ。そ。う。か。く。物スル。作スル。麼スル。何スル。よ。い。と。叫スル。うちスル。も。う。し。退スル。う。け。と。そ。そ。う。か。く。物スル。作スル。麼スル。何スル。よ。い。と。叫スル。うちスル。も。う。し。多シ。と。併スル。素大丈スル。眼スル。眴スル。左スル右スル。左スル右スル。汝スル。君スル。ト。彼スル。此スル。妖物スル。汝スル。人スル。逐スル。そ。り。スル。汝スル。左スル右スル。月形スル。各スル。け。ら。と。う。見スル。佩刀スル。と。あ。う。て。今宵スル。使者スル。立スル。是スル。事スル。汝スル。生スル。と。この。ちん。佩刀スル。の。徳スル。よ。う。て。羨スル。と。あ。う。と。も。過失スル。由スル。を。る。あ。が。こ。う。る。れ。汝。達。豫。と。う。汝。と。せ。ん。と。驚。せ。ん。て。の。塵。虛。と。く。妖。物。又。蕉。大。丈。棄。と。と。り。と。裏。皆。怖。乳。と。よ。り。同。乳。相。承。め。臆。病。ら。み。相。憐。と。奴。隸。へ。主。奴。隸。が。肩。ほ。し。と。只。一。步。を。い。し。と。坂。戸。の。神。社。到。り。を。そ。足。搔。と。か。と。つ。手。え。今。き。を。拂。と。ひ。風。を。腥。く。吹。く。地。と。額。乃。

行はれひあを。端や経は坂東道六町二十里あまり。ちや草つてんとやひ比。刃三の
 韻音となむ。こゝへきくもあとよ急々と声うぐく。田中が細道破
 ると。一叢鳥ま。嫁のわとうふ立在り。あうえ。いづぶるゆ歎を奏矣。
 且蕉火城抗は。主役遙より自死。そのものとぞく鬼形と類く。
 売死と朱の。般のれうと。頂に。主役遙より自死。そのものとぞく鬼形と類く。
 眼ハ百煉の鏡よひと。主役遙より自死。そのものとぞく鬼形と類く。
 异うううど。脣のあうみあ。主役遙より自死。そのものとぞく鬼形と類く。
 つべど力痛高く起らま。防刈又有りといふ。巨章魚の腕と疑ふ。役妖怪へ
 こゑふてそ。世の風聞へ空そ。現發山す。二王よ他。進むをひいと
 危く。主役遙より自死。逃とびき。のせほと素大丈。
 合は。主役遙より自死。只立ともとく御あると。主とくかの如く
 鞠。主役遙より自死。只立ともとく御あると。主とくかの如く
 奴隸も進退途滅失ひ。肌膚も毛とひ。鶏のとく。迷は
 画紙あり。先よ立奴隸の。短暗う。奴物の。被れよ半死い。死い。すばんす。蛇よ
 怖る者。さうまげふく。程よ。腹皆短暗よ。意もつづ。
 こうが勇氣よ。激さむ。おそる。跡よ。跟き。おの。日來春。神明
 が。院を念。三爻あすり。進。彼奴物へ。と。嘘。腰のとく
 走。先よ立。奴隸が。項髪搔扒と搔向く。水田へ。入と。投。う
 ひ。全軀へ。泥水掘埋。橋梁の間よ。頸のとく。え。の。蕉火を
 違ふ。畔の夏草。燃。かくて。ま。椎。脱。を。ま。り。共。火
 無。と。波方より。声。う。絞。素。大。丈。よ。激。さ。と。戰。國。の。習。俗。と。子。女。當。也
 ま。が。も。一。流石。よ。聖。知。り。遠く。椎。と。卸。く。或。火。劍。杖。と。凶。一。或。も。恒。刀。と。引。

接つ。主従六人を攻勢とし、下ふ面もやうどぎに殺して暮きぐ。妖物の些も騒ぐ。
打くる憲杖死左と右を歩り潜り。二まぢ三條引極投。又晃子を白刃射
す。毫陰丁と打ち合ひ。怪むるはるが衝と下せよ。前よりかば參りト後へ
旋う死模地と踰る。起ふとまとが搔扒く。水田の中へもぐくと人碑みを打
たゞ。泥水發と噴り。天よりあらぬ立の兩さへあらかう地や。轟にも蛙も彷
彿する。素太夫も懸切る。奴隸六人眼前水田の泥と塗れ。生死も
あらずとぞうしき。安木山子み似る。ことをかげ。弓箭の家と仕つ。而
東移く死よ就んや。と志成激しく。遠死窺ひ後方より。声もぬうけじ纏
月形の宝刀を抜く。砍んと見る。妖物へ眼をやく。身と沈く刃を避
ひ。此二三度疲れ。朱壺も落せず。没雄も。ひき巻が握固て素太夫が
無聲むがうふ。破れ。大刀もくちをさえと。妻を時めなむ。
馬もくひ刃と捨て。頭城抱へ橋の下ゆ。帆柱の綱も残延く。異うく。是
れ。馬も倒れて息絶く。ころと死よぐも日枯せり。草糸ふうつきの次を
滅ぼうと。明くモケ生。妖物ハ莞尔と笑く。素太夫と踰く。し
手をやく衣裳と剥く。唐櫃の棹も折り。腰もあら。素太夫と踰く。し
く。纏月形の刀と取く。打く。又打笑。鞘搔く。せよ。拵副の刀と
ともふ奪く。悠くとあら。腰も弯。奴隸が衣とも剥ぐ。上総木綿の
单なるとも。些へ物ようべき。水田の中よりひく。又引く。さば時
うつゆく。天も明人よあら。せん。櫻の内へかりやす。衣裳も
大刀もあら。唐櫃の棹も肩ひき。おほてゆると惜く。ぞいざうと
とひとうどら。唐櫃の棹も肩ひき。おほてゆると惜く。ぞいざうと
ゆく。と打笑ひ。往かへあら。きもうふけ。



第五 賢介の謀不恥と雪ヨー

私車丁七ヶ力乞の山居

却視迷橋素太夫ホハ青田の中ふうち倒さむ。その存亡へ定まらず。夜
曉ぐこの彼誰時より。彼此の里人ホ祭神のりて死ぬ者を坂戸の神社
赴く所よ横糸駈よ倒れ。彼主役と云ふ驚たさうと或ひものやどうふ
集合或へ村長許まつゆ経て。縁の起と告ぐ。横糸の村長也あも。莊客
们と驅催て喘く走りまつ蝶の如く聚ふ。彼此人と推りて且倒坐
くるものと見る。その姓名丁そ定ふ。あらわしとへ紛ばざるものあらぬ。凶もの
るや。

使者とて。すとく呆まどひつ。せんかせ下と罵すと衆皆毛
膚よ端濁を。早稻田の中へと立べ。水へ素より泥より深草焼の泥偶人の兩
くごと並み。ばらく粉の剥くふ異なれて。泥塗きる。素太夫ホと辛て
うじふ。主役七人。奴隸三人。縁後。ねぶたとあらざれど幸ふ

無く。大丈ホ四人。口吸きかづあひ。どと入りて。軽き。おとこ
いど。脣からふと泥りて。づれ。全身よ働くの。目子の。名と同故と
尋る。心答果敢。こちよせ。ごじしほ。歸て。板戸と。うあで主役と。これ
と。更させ。難波の。活。引揚。ア弥陀の。ぞく敬ひて。誠。茶餅。ふ。城
乗。莊客們。昇。長。宿所。扶入。庭井の水。汲。泥。洗。流。
夜と。更させ。難波の。活。引揚。ア弥陀の。ぞく敬ひて。誠。茶餅。ふ。城
盡。叮寧。ふ。勤る。程。素太夫ホ。や。ふ。玉の。猪。駒。と。九。贊代を
棄。且く預。鐵月形の。宝刀。失ひ。と。と。かく。みを。罪
の。かげ。道。され。がと。こ。の。便。遂電。せん。の。脣脚立。と。や。病
愈。疼痛。去。逃亡。は。自在。あり。ゆ。捨。ら。女房。畜。が。こ。の。えり。その
憂。苦。あ。と。と。と。不。便。り。ふ。せ。は。と。今。更。ふ。ひ。も。て。野。干
玉。の。昨。夜。寝。止。撲。傷。り。苦。れ。負。月。と。痛。や。く。生。悔。身。て。泣。ぬ

A horizontal scroll featuring a cursive calligraphy of a poem. The characters are written in dark ink on a light, aged paper background. The style is fluid and expressive, characteristic of the 'caoshu' (cursive script) used by Wang Xizhi.

擲且く桃戦ひ。が素大丈、戰慄く。主後遂々一致せば。宰
との事、實る。あぐんか。その罪いよ。輕
太丈と引取。みづう者奴と鞠向。
さんざ。とくと。焦燥の苗頃ね監小時。
沸氣きの凄ひ。推てやとか。
夜陰の使者。仰付ら。と刺鐵月形のちん佩刀と預てたまふ。
罪と罪とく。かくも討つまされ。一團の民。警る。まどひて。却君と織
べ。今どうもふ愚意とやうき。只刑罰。或寛りと。且く渠と助けあふ
宝刀の往方とくづれ。求め。やかくせよ。と命じゆう。そのとびへ。余れ捨
ても。す功とく。がんや。かくて妖怪のまゆ。顕て。宝刀をみびかんむふへ。君の
目。けむのとびんせりよ。と織アヤ。くじりのとわく。忠義よ死セ。栗右衛門。送
蹟もくふ御経せど。公私。幸ひ。は。寛仁大度へ固る。是ど。の。穏
住の寺沙汰。と願く。く。とちそく。凍やうせ。義完。些。怒氣。かさすりて。
転く。お監と退く。セ。曲录み頬杖。衝て。再て。深念。の。折正木時猶。すわら
あく。矣。其端然と居る。やうく。は。とく。止く。召ト。せら。素大丈。う。ふ。体。
苗頃。が凍。一。麿首。とく。成。涙。あ。と。せ。汝。へ。これ。を。何。と。う。ふ。と。密。や。う。よ。向
ゆ。ハ。時。猶。霎。時。頭。と。傾。け。彼。苗頃。ね。監。ハ。素。大。丈。ゲ。甚。暑。歎。ふ。親。ノ。
文。参。ひ。り。之。か。と。大。君。の。面。と。犯。ノ。凍。や。う。セ。底。立。意。良。員。の。袖。汰。ノ。
但。と。ど。も。公。道。又。親。疎。ほ。今。お。監。が。す。う。セ。一。條。素。大。丈。ゲ。う。人の。ミ
う。と。ぞ。尊。一。君。の。ち。ん。あ。ふ。ど。の。人。や。う。ぎ。れ。丈。は。賢。慮。よ。及。ぶ。へ。う。う。ぞ。金。割
神。の。妖。怪。ハ。そ。の。真。偽。然。糺。る。某。宵。毎。夥。兵。と。生。某。も。又。ス。あ。び。よ
み。が。う。巷。路。と。うち。逃。う。そ。の。在。所。と。探。と。ど。も。ほ。う。と。ら。ご。ひ。ふ。此。度。

徒櫻素太夫が。斬賣代宝刀を奪集として居る。体と案どろか。且没不測の癖者。金剛神が假托する。掠奪を疑ひる。緯緩やくふ計でみづへ。彼強盜を生拘。宝刀をとこうと復さんと。又やうがれよひつと。洞と竭して。諒へ。義発あが。うち急ひつゝ。所予が意を擧つて。今素太夫が罪状糾り。その頸と刎へ。予が怒の剣アリ。彼癖者もかそきまどひく。うろおとど遠く走る。強盜。ト。さじとの地と。ちと。藏月形の名刀も。ぬくび返す。ト。うまうん然。ら。件の白後へ。且く宿所よ推挽らせく。大刀と盜賊と獲つる後。又罪城正は。をもそく。奴隸へゆく。外口ふ足と。も死する。のへ葬せら。傷死する。か。医療と加く。予がどうぞ死をとせよ。叮囑。よ仰。ト。時綱。遂く頭破低く。うけ。慈君の沙汰。又感涙と葉あへ。もぞ退す。さと。又。徒櫻素太夫。ひひが。死失。そが。やく。宿所。又。聞。死らう。人の能傍のうと。妻鮮衣。う。歎。な。か。私率奴隸。も云云。よ。か。ひしやせんと。彼。又慚。世。愧。て。う。み。ふ。家。よ。せ。陥。く。肩躬。も。や。麻衣。の。糾。る。が。と。其。の。日。を。暮。を。つ。早晚。拂。ぬ。庭。わ。秋。ま。む。と。旦。房。の。風。ぞ。か。づ。く。丈。月。う。ぐ。ふ。り。ふ。あ。や。う。撲。傷。を。こ。う。く。歩。行。不。自。由。う。う。禁。ど。も。う。ひ。も。う。の。関。へ。も。う。ど。五。十。日。と。限。り。ふ。て。切。脇。仰。身。ト。き。か。ん。綿。頸。を。や。刎。ら。と。ん。と。他。の。批。評。月。ふ。と。や。へ。相。の。達。曉。物。あ。う。ふ。か。ち。と。の。と。の。と。鮮。衣。の。今。文。よ。や。う。う。を。う。れ。歎。を。と。く。又。つ。ど。と。ち。よ。や。親。の。る。よ。女。子。た。う。朽。す。れ。う。の。ふ。よ。五。情。男。児。で。あ。う。ん。み。羞。が。ち。く。阿。容。く。と。か。く。ま。で。う。う。う。あ。セ。ド。ト。う。や。年。ね。木。像。う。と。と。夜。く。生。く。人。伏。ひ。掠。奪。集。と。と。あ。ぐ。う。と。あ。ぐ。う。と。鹿。の。鬼。大。江。山。の。変。化。と。ひ。一。昔。か。く。う。め。み。く。と。き。う。う。か。と。件。の。金。剛。神。も。檢。理。よ。あ。う。ざ。う。せ。盗。賊。の。所。か。る。下。

大川藍

これらの眞傷死探索りて。その夜の賊とあらず。あぶきといふは、
多く良人の罪と貰ひんことをぞれより捷徑るべ。夫婦が遇世の悲喜を
みづく作る華か。繼橋のまことに結果るがいと浅くうなづ。女子の智慧をも
笛べたとき後ど。ひづく敗を俟べ君のゐみへ不忠え家のゐみへ不孝へ。
うそやうそ父へ男女とゆうやく。子を舉りて親と家と妻の
功徳をかく流矢よ命を隕し。残る吾脩へ憑か。かうぬまふ家倒さる。それを
うそやく道をうぞりよこうとまのとくと。神又仏又旦暮よ祈は信す
家のゐ女兒がると今。當代親の灵魂もあられと。受つ祐けのとくや。
さそりふせんとぞうふ冷物されども身よ逼す。凶月の柰れと釋きて人目
うまれべとと泣声次の間へゆえん。お居の簾推揚て。宿や起りゆひと。同
と准とくとく。晋代の老僕丁七く當下丁七へ近く小膝と衝くや。すくとくへ



